ニュー・ラナークへの招待

嶺井正也

「百聞に一見は如かず」

やはり実際に行ってみて良かったことを実感した。

河岸上にある駐車場で車をおり、ニュー・ラナークが見える位置まで下っていった時に見えた風景は想像をはるかに超えたものであった。

ここに来る前、下に引用した「世界遺産オンラインガイド」で二度ほど調べ、なんとなく雰囲気をつかんでいたつもりではあったが、圧倒されてしまった。深い谷間とまではいえなくても、かなり下を流れる川沿いに写真のような建物があるとは予想していなかった。

ここから坂道を下っていくと、村の上の場所に出る。左端の建物（下の左側写真）が、ロバート・オーエン（1771～1858 年）が住んでいた建物で、今は博物館になっている。

坂道の途中から左に降りていくと村の中心部に向かうことができる（上の右側写真）。

世界遺産に登録するということでかなり整備されたであろうから、オーエンの時代の村の雰囲気とはかなり異なっているとは思うが、歴史的な試みがなされた場がこんなところに存在したんだと思うと感慨無量であった。

もう一つ驚いたのは、村の端を流れるクライド川の水が黒い色をしていたことであった。日本ではみたことのない色の川水。同行した矢吹芳洋氏によると、これはピート（泥炭）のせいだとのこと。ピートはスコッチウィスキーの独特の香りづけ（スモキー）欠かせない。

ここにはオーエンが経営に参加した綿紡績工場があった。それは川の水を動力として織機を動かして生産を行っていたのである。

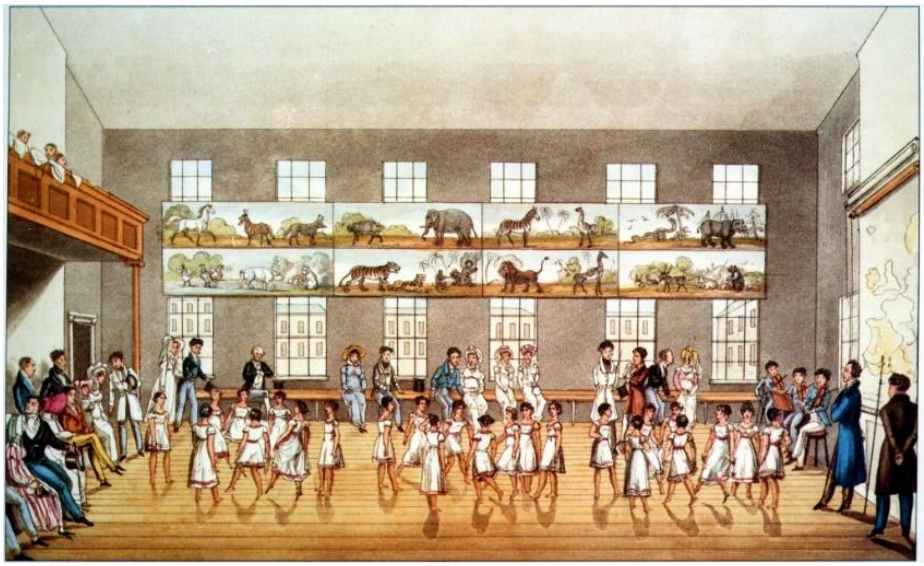
ロバート・オーエンは社会改良者あるいは「空想的社会主義者」あるいは協働組合運動の祖などとして知られている。日本でもかなり知られており、「ロバアト・オーエン協会」なる組織もある。

もとより彼が「性格形成学院」を設置し、実践したことは教育研究の分野ではよく知られている。ちなみに『岩波小辞典　教育』（勝田守一編、1968 年 11 月 1 日第 1 版第 11 刷では、彼の教育思想や実践について次のように紹介されている。

> その幼児教育の実践、労働と教育との結合、教育による社会改造への志向など、重要な意義が次第に認められるようになった。彼の環境論は、理論としては比較的単純であるが、それがヒューマニズムにつらぬかれた実践に媒介されているだけに、力強い確信にみちている。

今も残っている教室

＊当時、白地木綿のローマ式チウニックの形の服をきた子どもたちがスコットランド風フォークダンスを踊っている様子。↓



https://www.co-op.ac.uk/2011/10/co-operatives-uk-secretary-general-calls-co-operation-education/

しかし、残念ながら筆者は彼の著作をきちっと読んだことがなかった。今回はじめてニュー・ラナークを訪れ、現地に足を踏み入れたことで彼の教育論を自分なりに研究したいという意欲がわいてきた。「社会主義国家」がほぼなりたたくなるとともに「社会主義教育」の色も褪せてきたいま、改めて彼の社会改良や協同組合的発想と教育の関係を調べ、考えてみたいと思っている。

ロバート・オーエン教育変革センター

ニュー・ラナークで興奮のひと時を過ごした日の翌日、別件でグラスゴー大学を訪れた。アダム・スミスが学び、教えた大学であり、また、あの「まっさん」が学んだ大学である。おりしも新学年が始まろうとしていた時で、荘厳な校舎の前庭では日本の大学と同じようにサーが賑やかに行われていた。なんとマルクス主義研究会なるサークルも宣伝活動を行っていて、

今どきの日本の大学との違いを感じた。

実はグラスゴー大学には「ロバート・オーエン教育変革センター（Robert Owen Center for
がある。その設置理由は以下の通りである。

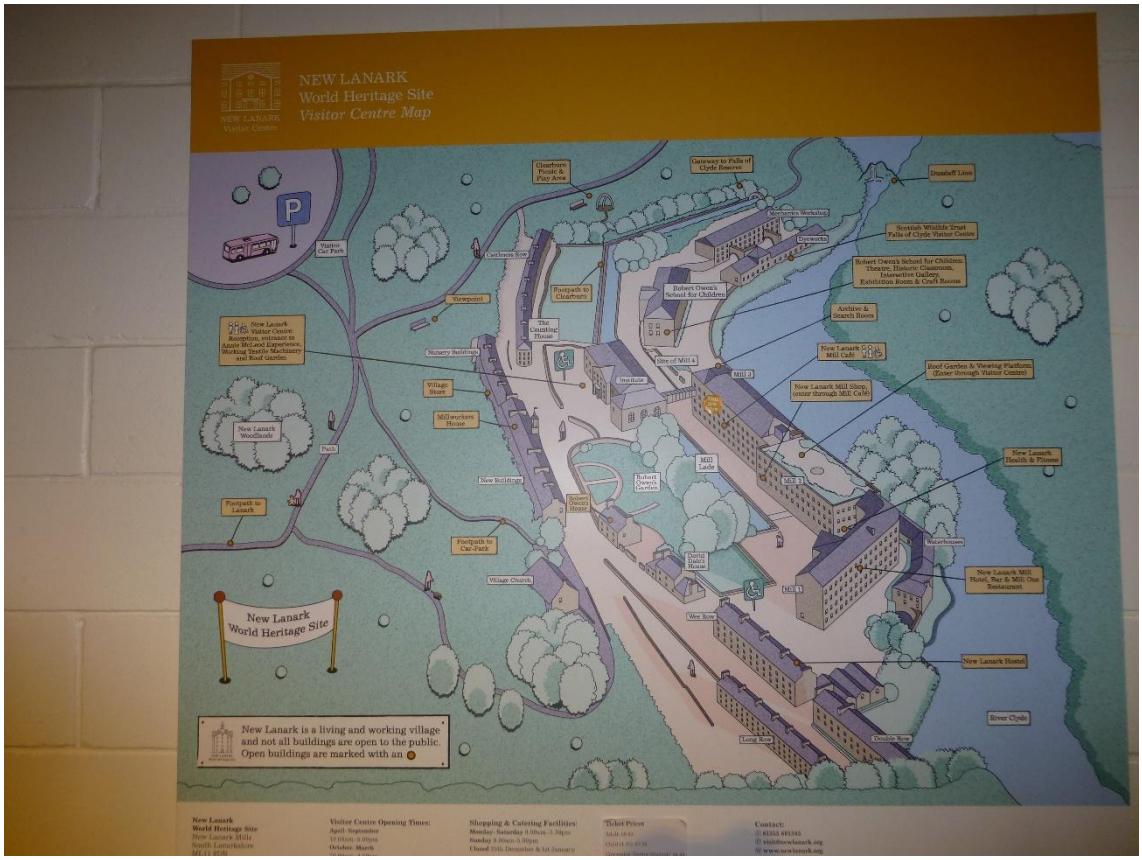
グラスゴー大学のロバート・オーエン教育変革センターの設置に先立つことおよそ 200 年前の 1813 年 12 月 24 日、グラスゴー・ヘラルド紙（the Glasgow Herald がニュー・ラナークを売り出す広告を掲載した。ロバート・オーエンがこの建物を購入し、1816 年に性格形成学院（the Institute for the Formation of Character）を公式に開設した。

学院の一階には三つのアパートメントがあり、そこでは年齢の低い子どもたちのクラスがあり、読み方、自然史、地理を学んでいた。二階にはランカスター・プランで設計されたメインルームがあった。二階には、もうん一つ小さな部屋があり、コーナーで管弦楽を演奏できるギャラリーとなっていた。そこは踊り部屋や講義室として使われたり、時に読書室にもなった。オーエンは労働者階級のコミュニティづくりへの新たな希望を提供し、ニュー・ラナークの実験がコミュニティ・スクール（community schooling）の先駆者となるように、教育を社会変革の中心に位置付けたのであった。ニュー・ラナークは彼の理想の実証基盤として国際的に認められ、今やユネスコの世界遺産となっている。

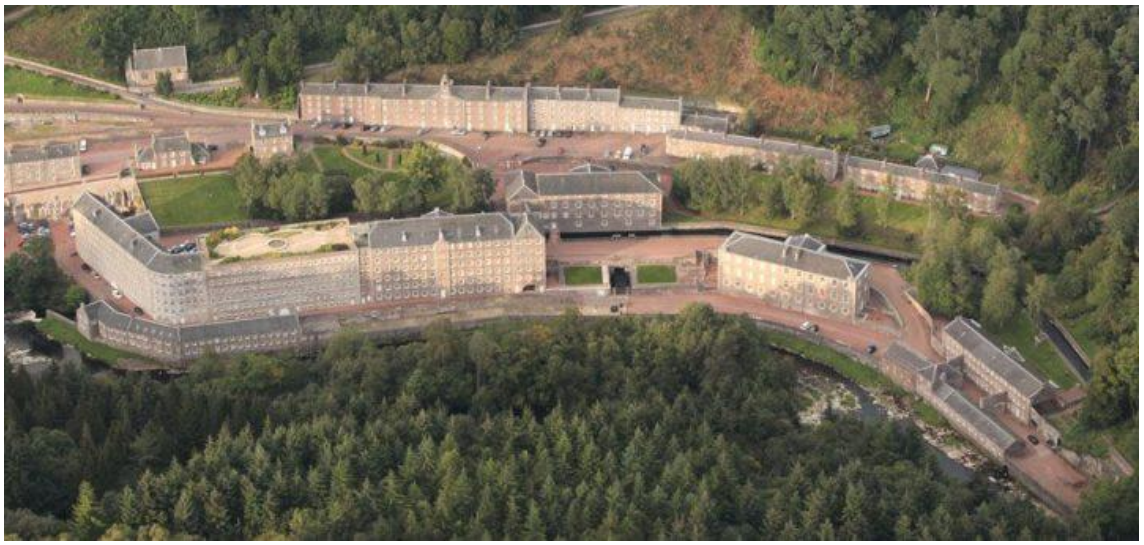
国際主義者でありコミュニタリアンであったオーエンはウェールズで生まれ、イングランドで富を築き、合衆国で改革の可能性を探究した。しかし、オーエンのビジョンと熱意がもっとも深く根付いたところはスコットランドである。グラスゴー大学のロバート・オーエン教育変革センターの価値とビジョンはニュー・ラナークで生まれ、そこから外へと広がっていったオーエンの理想に支えられている。

スコットランドを代表するエジンバラやグラスゴーという都市から車で一時間程度で訪問できる場所にあるニューラナークをぜひ一度訪れてください。

筆者は、何はともあれ彼の著作である『性格形成論―社会についての新見解―』（世界教育学選集、明治図書、1974 年）を読んでみたい。



＊展示されていた鳥瞰図を写真で写したもの。左上に駐車場がある。そこから右下へと歩いて下りてりていった。

世界遺産オンラインガイド（https://worldheritagesite.xyz/new-lanark/）より

イギリス北部の村ニュー・ラナークは、スコットランド・サウス・ラナークシャーの都市ラナークから約 2.2 km のところに位置するクライド川沿いにあり、18 世紀末の産業革命時に造られた紡績工場と労働者住宅群から成る産業集落です。
1786 年にデヴィッド･デイルが綿紡績工場や工場労働者用の住宅を建設したことを起源とします。デイルの娘婿であった博愛主義者で社会改良主義者のロバート・オウエンも名を連ねていた共同所有のもとで、ニュー・ラナークは事業的にも成功を収め、いわゆるユートピア社会主義を体現する存在となりました。
人道主義者だった彼は、工場の利益を労働者のためにつぎ込みました。村にある店舗はオーウェンが開いたもので、ここでは品物を一括購入で安く仕入れ、原価に近い値段で住人に売っていたといいます。このシステムは後に生活協同組合へと発展しました。
ニュー・ラナークの工場は 1968 年まで操業していたが、衰退期を経て、1975 年に村の取り壊しを防ぐためにニュー・ラナーク保全トラストが創設されました。